

シェイクスピア能と R.H. Blyth

Shakespearean Noh and R.H. Blyth

宗片 邦義
MUNAKATA Kuniyoshi

Abstract :The following are the English handout and the summary in Japanese of the “Special Lecture” given at the 89th General Meeting of “The English Literary Society of Japan” held at Shizuoka University on May 20・21st, 2017. As a fortuitous result from the close relation of teaching and research, an unprecedented fusion of Noh and Shakespeare in the form of Noh adaptation of Shakespearean plays, as proposed by NATSUME Soseki in 1911, was realized: *Noh Hamlet* in Shakespearean English (1982) and *Noh Othello* in Japanese (1992). This paper explores the feasibility of this project through its evident difficulties: 1. Technical or formal difficulties: differences of Japanese and English; and 2. Spiritual difficulties: the differences of nature or characters in Noh and Shakespeare. Noh is a poetic dance opera, founded in the 14th and 15th centuries, influenced by Zen, and it respects simplicity, spirituality, and *yūgen* (hidden beauty). Not based on realism, its aim in its highest stage is for its participants to experience *satori* or enlightenment. Creating *Noh Hamlet* in English was hinted at by R.H. Blyth (1898-1964), the present writer’s professor and author of *Zen in English Literature*. His last words were: “Human life has a meaning only if the struggle is hopeless”; “Without humor, you cannot live in this world.”

Keywords: シェイクスピア能、R.H.ブライズ、『能ハムレット』、坐禅、「生死はもはや問ふまでもなし」、夏目漱石、「則天去私」、津村禮次郎、足立禮子、世阿弥、幽玄。

Shakespearean Noh, R.H. Blyth, *Noh Hamlet*, Zen meditation, “To be or not to be, is *no longer* the question.” NATSUME Soseki, “The readiness is all.” TSUMURA Reijiro, ADACHI Reiko, Zeami, *yūgen*.

1. English Syllabus

Introduction: TSUBOUCHI Shoyo’s and NATSUME Soseki’s views on Noh adaptation of Shakespeare: negative and positive.

Development 1: Technical

1) How is Noh singing in English feasible?

- Blank verse (*iambic*) vs *Shichigo* (7 · 5)-*cho* (*even stress*).
- Consonants vs vowel endings.

“Takasago ya”---“To be or not to be”; “Akatsuki goto no Aka no Mizu” ---“To be or not to be, that is the question.” Rhythmic, non-rhythmic, and prose in Noh and Shakespeare.

2) Five Acts in Shakespeare and traditional “Five play program” of Noh and two-scene plays.

Development 2: Spiritual

1) Why *Noh Hamlet*?

The entrance of Ophelia’s ghost makes the play more than “theatre” to be performed before an audience for its entertainment.

For Hamlet to “sit” **zazen** with the **koan** “To be or not to be” before Ophelia’s grave (*Izutsu* 『井筒』) and then rise up and say, “that is *no longer* the question,” and that “He only wakes who casts the world aside” (*Atsumori* 『敦盛』), offers new insight into Hamlet’s character: To live in the present: “The readiness is all” evokes Buddhist **Satori** Enlightenment: (*Yamanba* 『山姥』); “Heaven make thee free of it!”; “Exchange forgiveness”; “Flights of angels sing thee to thy rest!” (*Eguchi* 『江口』).

-The world premieres of “***Noh Hamlet in English***” (Five scene version, 1982, and Two scene version, 1985). (*shite* M.K.) - **[Presentation of abridged DVD]**

2) Other Shakespearean Noh plays in English staged: *Othello*, *Macbeth*, *King Lear*. (*shite* M.K.)

Development 3: Realization of NATSUME’s proposal (1911)

-The first Shakespearean Noh plays in Japanese: *Othello* (1995), *Macbeth*, *Cleopatra* (so far *shite*, TSUMURA Reijiro); *Hamlet* (*shite*, ITOH Yoshiaki), *King Lear* (*shite* Cordelia, ADACHI Reiko), *Romeo and Juliet* (*shite*, NOMURA Shiro). “It is much pride for fair without / The fair within to hide.”

Conclusion: R.H. Blyth (1898-1964) on Zen, poetry, haiku, senryu, and humor.

2. Shakespearean Noh and R.H. Blyth

坪内逍遙と夏目漱石の「シェイクスピア能観」。逍遙は子供の頃兄に謡を習い、そのあまりの厳しさに、能がきらいになった。後年、能は博物館に収めておけばいい、と言った。一方、漱石は、明治44年(1911)に、その逍遙の「ハムレット」劇を観て、シェイクスピア劇は日本語に翻訳できるものではない。どうしてもやるというなら、「能とか謡とかの様の別格の音調によって、初めて、興味を支持されべき」(ママ)と『朝日新聞』に書いた。彼は宝生流の謡を習っていた。こうしたことは、図書やパソコンで調べれば分かることで、今日はこうしたことは全部省いて、私の個人的な体験を話させていただく。

研究と教育・教育と研究

この両者には密接な関係がある。文学の面白さ、詩の感動や効用は教えることができる。今回もこの議論があったかもしれないが、教育とは、ひっきょう、学生と教師との、また教材との出会い・巡り合わせの妙ではないか。

高3の、受験のための夏期講習に、中村善士先生はシーグフリード・サスーンの英詩のレコードを聴かせてくれた。後でその意味が分かった。大学1・2年で、福田陸太郎先生は *Poetry for You* と *Golden Treasury* を教材にしてくれた。講義はなかったが素晴らしい英詩入門だった。ブライズ先生は、3・4年で英詩の朗読法を教えてくれた。先生の英詩講義は一種の宗教体験・啓示の時であった。外山滋比古先生は、3・4年で *Hamlet* と T.S.エリオットの評論を教材に、エリオットが *Hamlet* 冒頭の22行を絶賛している等々教えてくれた。洋行帰りの斎藤美洲先生は、G.B.S.の *Saint Joan* を教材に、一方、リチャード・バートン張りのハムレットのセリフを聞かせてくれた。

かくてわが仲間の *Hamlet* 本読みが始まった。そして4年の春、“*Hamlet Act I in full*”を上演した。稽古中に、ハムレットとホレイショのリズムの違いに気が付いた。全体としては iambus (弱強格) で書かれているが、セリフとして音読すれば、ハムレットのセリフは時に trochee (強弱格) とか anapest (弱弱強格) に変わる。一方ホレイショは iambic の安定したリズムだ。彼らの性格の違いの表われか。私はこれを発見のつもりで卒論に書いた。だが、外山師は何もコメントされなかった。今日再び60年ぶりに、この日本最高の英文学会で発表する。

とまれ、この時覚えた数百行は私の貴重な財産になった。二日目の公演後、朝永振一郎教授と西脇順三郎教授が、原子爆弾と現代詩の作法は類似している。遠いものを結びつけると強烈な破壊力が生ずると。これは私の創作研究のヒントになった。そして深山幽谷シェイクスピア研究の何合目かで、今も私は道草を食っている。

「英語能ハムレット」

さてこの *Hamlet* が、なぜ、いかにして能と結ぶつくことになったか。福原麟太郎・中野好夫などの英文学書にはしばしば能・歌舞伎・文楽などへの言及がある。故郷の黒川能には高校時代は全く関心がなかったが、能に最も感動したのだ。新劇のシェイクスピア劇は沢山観たが、知的な興味は湧いても感動とか、能を観たときにたまに感ずる深い精神的な満足感がない。シェイクスピア原文の語と語の組み合わせの魅力・魔力、blank verse の躍動感がない。そこで思いついたのが、*Hamlet* の原文に能の節付けをして *Noh Hamlet* を創ること、さすれば世界中多くの人がああ、能の感動を体験できるのではないか。

やがて梅若万紀夫師（現万三郎）観世流能楽師の下で謡いと仕舞を習い始めた。誰に英語謡曲の話をして一笑に付された。英語と日本語の違いを考えれば当然だ。一音一音強く延して謡う謡曲が、子音の多い英語で謡えるはずがないのだ。しかしエマスン研究の超絶主義者入江勇起男教授は、「人が不可能だと言っていることこそやるものだ」と。お名前通り、勇気の出る教えであった。

さて、それから数年後、2年間のアメリカ留学中、ハーヴァード大学やアベイ・シアターなどでハムレットの「第一独白」“O, that this too too solid flesh would melt...”を演ずる機会があり、セリフはそのままで仕舞の型付けで舞った。（Cf. 『英語文学世界』75.8）その結果、一曲の能を創るべきと励まされて帰国。また梅若師の元に通った。「アベイ・シアターで新作の能演出の話があったのなら、帰国せずそれを受けるべきだった」と小川五郎教授（筆名高杉一郎）にお叱りを受けたが。

そしてある日、謡曲「高砂や」と同様に“To be or not to be”が謡えることに気が付いた。またあの『船弁慶』の一節を、「こーの一と一きーよーしーつーねー」と iambic に謡っても殆ど違和感はないと。“Ho-ra-tio says 'tis but our fa-a-an-ta-sy.”など、シェイクスピアは謡曲風に謡えるのだ。大発見だった。気が付いてみれば、観世寿夫師の謡いなどは必ずしも even stress ではない。演者によって違いがある。歌謡曲のプロの歌い方は結構歌詞が前後する。むしろそこが面白い。シェイクスピアは iambus で書いていても、実際のセリフとして朗読するときには時に trochee や anapest になると同様だ。また謡曲の「拍不合」の謡い方も、さらに「詞」（ことば）の箇所も、（シェイクスピアにも散文もあり）、工夫すれば、謡えるのだ。工夫さえすればおそらく何でも謡えるのだ。さらにまた、五幕の *Hamlet* は、能の歴史的五番立の「神・男・女・狂・鬼」にうまく当てはまる。「父の亡霊」「ハムレット」「オフィーリア」「狂女」「フェンシング」と。世阿弥の「きはめたる才学の力なけれども、ただ工（たくみ）によりて、よき能にはなるものなり」が支えだった。

さてしかし、道具立てや手法・構成などのテクニークで能が出来るわけではない。能の精神性や宗教性が無くては、一曲の能にはならない。

世阿弥は「謡いと舞」を能の二大要素とした。謡の「別格の音調」（漱石）や「実在感・生命感・祈り」（観世寿夫）は稽古する以外にない。「稽古は強かれ、情識はなかれとなり」。それを制作に生かす。謡曲は声明からきたという説もある。また能の舞（動き）は動きが少ないほど表現豊かとも言われる。「不動の表現・存在・being」だ。これも稽古する以外にない。そしてあとは観客の想像力・イマジネーションに委ねる。「リアリズムは愚か者の手法」（W.B. イエイツ）だ。“Being is the great explainer.”これはヘンリー・ソローか。

2012年、南仏はカンヌのリセ（国立高校）の劇場で『英語能ハムレット』を独吟独舞で披露した。約一時間、ハムレット・オフィーリア・地謡、全部一人で謡い舞った。公演後質問が沢山出た。その中に、「自分はシェイクスピアにもハムレットにも能にも全く興味はない。しかし感動した。それはなぜでしょうか」と。私は、能はリアリズムではなく、その独特の発声とか不動の舞いとか、つまり禅精神の演劇表現“*Theatrical expression of Zen*”、“*Zen Drama*”なのだとか、“*Transcendental Drama*”などと説明したりした。

世阿弥は禅の修行をした。漱石も何かを求めて参禅した。私は自身の乏しい経験から、座禅は無心になることが目的ではない。公案（課題）に対する答えを出すための集中なのだ。そして思いついたのが、“*To be or not to be*”はハムレットにとっての公案なのだ。彼はオフィーリアの墓前で座禅を組む。長い瞑想の末、答えを得る。愛する人の死に、「もはや生死は最大の問題ではない。人は皆死ぬ。ただ早い遅いかの違い。今は生きること。覚悟がすべて」“*The readiness is all.*” 公案への答えを得るのだ。されば胸騒ぎを覚えたれど、レアティーズのフェンシングの挑戦に応ずるのだ。その結果、これまで逡巡し果たせなかった父の遺志（復讐）を達成し、昇天する。

18歳で徴兵を忌避し、conscientious objector「良心的徴兵忌避者」として投獄されたブライズ少年は、後年、ハムレットを愚かな若者と評した。人生、竹を割ったようにキツパリと *decisively* に生きるものだ。また、死は、人と人を引き裂くものではない。それまでの二人の関係を *accelerate*（加速する）のだ。蘇るとはそういうことか。英国の作曲家 Benjamin Britten が日本で能『隅田川』を観たとき、この母子はイエスとマリアだと感じた。亡くなった子供が母親の前に姿を現す。詩人の James Kirkup が *Frankly Speaking* の中に書いている。私は *Noh Hamlet* をそういう夢幻能に近い形に作りたいと思った。カーカップ氏も CO だった。序でながら、昭和天皇がマッカーサーに会われる前にブライズ先生のご進講を受けられた。「アメリカ人には直接表現が必要」。マッカーサーにできないことを行い、彼を驚かせること、と。これは今度出た『昭和天皇実録』にある。

ブライズ先生の師、鈴木大拙師が禅精神の表現と語った能『山姥』のキリ「暇申して帰る山の・・・」の「悟り」を、『能ハムレット』の4番目「狂い」のシーンに（「悟り」は「狂い」にぴったりだ）、即ち全く同じ筋付けで、“*To be or not to be, is no longer the*

question” 「生死はもはや問うまでもなし」と謡う。また、この世に生きる苦しみから脱却する能『江口』のキリ「心留めずは浮世もあらじ・・・」を 5 番目に、即ち全く同じ節付けで、“Exchange forgiveness・・・” 「許し合おう・・・」と謡い、最後、「光と共に白妙の。白雲にうち乗りて。西の空に行き給ふ」と同じ節付けで、地謡が、“Now cracks a noble heart. The rest is silence. Good night, sweet prince. Flights of angels sing thee to thy rest” と謡う。

これで、『能ハムレット』は完成する。ブライズ先生はどこかに書いていた。“The death of Hamlet, like that of Christ, is outwardly a failure, but with some inner success and glory.”と。この 5 場構成の“*Noh Hamlet in English*”を、磐田市の醍醐荘能舞台で 1982 年 11 月に初演した（「能シェイクスピア研究会」）。British Council の紹介でこれを観た London Sh. Group 一行の団長 John Fraser 氏は、「瞑想シーンが最も印象的」と語った。

(DVD : *An Experiment: Noh Hamlet*, 浅井方通制作 8mm Film, 82、約 20 分)。

翌年、東京初演は立錐の余地なき矢来能楽堂で上演時間 4 時間を昼夜 2 回公演。NHK ニュースや週刊誌や海外新聞で報じられた。外国人には好評だった。早稲田大学教授で *Spectators' Handbook of Noh* の著者、Upton Murakami 教授が、“It was the most wonderful esthetic experience. I had never imagined that such a marvelous fusion of Shakespeare and Noh could be possible.”と。だがその後、国内能評家の「長すぎる」に応えて、最初に Horatio が僧侶（ワキ）となって登場する形の二場構成に短縮し、85 年、国立能楽堂で公演した。

(DVD : *Japan Screen Topics*, 85-4, 外務省制作、約 2 分)。

私は *Noh Hamlet* を英国で 4 回舞っている。英国最初の演劇学科、ブリストル大学公演（90）は映像記録が残っている筈。次のグローブ座ミュージアム・ステージはワナメイカー氏の為に舞った。後の 2 回、マンチェスター（12）とチェスター大学（13）での独吟独舞は、YouTube に短縮版が入っている。

英語能はその後、『オセロー』『マクベス』『リア王』と制作、演出・主演（シテ）し、ジョージア州の YKK を皮切りに、ハーヴァード大学や東西融合劇場など東部から西部まで、アメリカ 10 都市で公演した。解説で私は“Zen Drama”という言葉を使ったが、ブライズ先生が世界に広めた“Zen”は、仏教の一宗派の禅ではない。キリスト教も仏教もイスラム教も、あらゆる宗教の根底にあってそれらを生かしているもの。全ての生あるものを生かしているもの、その命。生命、精神、割り切りすぎかもしれないが、すべての宗教の根底にあるもの。それで近年、今や世界を破滅から救うものは“Zen”である、などと言われ始めている。私は「ブライズ禅」をそう受け止めている。

日本語シェイクスピア能

さて、明治44年(1911)坪内逍遙の『ハムレット』を観ての、夏目漱石の「シェイクスピア能」の提唱(朝日新聞)は、当然日本語による能翻案であった筈で、三保の松原の薪能で毎年10月にお会いする能評家の堀上謙氏に説得され、日本語の『能オセロー』台本を制作した。観世栄夫師が引き受けられず、津村禮次郎師(観世流能楽師)によって、台本・節付ほぼそのままの形で、宝生能楽堂で92年10月6日、朝日新聞社主催で初演された。ツレ・デズデモーナ：中所宣夫、アイ・エミリア：野村武司(現萬齋)。能楽師による日本最初のシェイクスピア能で、しかも最初の口語能公演であった。漱石が観たら何と評されたらどうか。

(DVD: 放送大学「東西演劇の比較」第25回、93、約9分半)。

『能ハムレット』もその後04年、梅若研能会(アイ・墓守：野村万作)によって初演されたが、津村師は『能オセロー』の好評をうけて、その後、拙作能『マクベス』『クレオパトラ』『トマス・ベケット』(エリオット『寺院の殺人』。98年、ケント大学の国際演劇学会でも上演)、『ふたりのノーラ(人形の家)』『ポトマック桜』と初演。特筆すべきは、女性能楽師の足立禮子師が『能リア王』のシテ・コーディーリアを83歳で初演(07)、絶賛され、再演・再々演・再々々演されたこと。遠藤光氏の毎回の感動ほか(Cf.『融合文化研究』10・11・13・16号)、山形和美氏の劇評は、「ヨブ記』『リア王』と並べ論じ注目された。

最新作は、シェイクスピア没後400年に先駆けて13年の国立能楽堂『能ロミオとジュリエット』で、日本能楽会会長の野村四郎師(観世流能楽師、79歳、その後人間国宝)のシテ・ロミオによる。作者が特に工夫したのは、1. ロレンス法師をアイ狂言にして物語全体を簡潔に語らせた。2. ジュリエットに原作キャピュレット夫人の言葉“*It is much pride for fair without / The fair within to hide.*”「目に見えぬ美しき隠す心こそ美しき人の誇りなれ」を謡わせた。世阿弥の「秘すれば花」に通ずるか。3. 最後にキリで、ロミ・ジュリ二人の霊を白装束に小さな王冠を着けて登場、相舞を舞わせ、親たちは登場させず、地謡に、「愛児の非業に迷い覚め。怒りも解けて許し合う。許す仲とはなりにける。この世に生きては純粹(ひとすじ)に。仇(かたき)を愛せる青春は(+)。死を経て一つ安らかに。王者となりて蘇る。これぞ真の愛の賜物。神のこの世のお浄めと」と謡わせた。

(DVD:『能ロミオとジュリエット』、13、冒頭部約10分上映)。

結語

シェイクスピア劇は全体として「許し」がテーマ。『マクベス』の如く、夫の出世を愛と取り違えた女とその男を「無意味な人生」と突き放した例外はある。能は「祈り・救い」の芸術。世阿弥は万人の「壽福増長(長命)」を願った。私のシェイクスピア能もそうありた

い。私の能を観たら、天国へ行きたいと願うような。ブライズ先生の必死の願いにかないたい。先生の最後の言葉：“Human life has a meaning only if the struggle is hopeless.” “The object of life is suffering.” 「この世はヒューマー(心のゆとり・悟り)なしには、生きられない」。

(日本英文学会第 89 回大会特別講演要旨、於静岡大学、2017.5.21)

主な参考資料

文献

1. MUNAKATA Kuniyoshi, *Hamlet in Noh Style* 『英語能ハムレット』 Kenkyusha, 1991.
2. 上田邦義『日英二か国語による「能オセロー」創作の研究』勉誠社、1998.
3. 『融合文化研究』第 1 号—第 24 号、国際融合文化学会、2000—2017。(電子版は「国際融合文化学会」HP から)。
4. UEDA Kuniyoshi, *Noh Adaptation of Shakespeare*, Hokuseido, 2001.
5. 川田基生『シェイクスピア能研究』博士論文、日本大学大学院総合社会情報研究科、2006.
6. 上田邦義『ブライズ先生、ありがとう』三五館、2010.

その他

1. An Experiment: *Noh Hamlet*, 8mm film, Asai Films, 1982.
2. Shakespeare Japanese Style, *Japan Screen Topics*, Japanese Foreign Ministry, March, 1983.
3. 「あのまちこの人：ザチャレンジ『能ハムレット』」、テレビ静岡、1984.
4. “Noh Hamlet” Solo performance, at St. Mary the Virgin’s Church, Manchester and Chester University, UK. “YouTube” Abridged in 30minutes, 2012・13.